

# わが国最初の日本語訳クルアーンにみられる 仏教語をめぐって (一)

東 隆 眞

## On the Buddhist terms in the first Japanese translation of Qur'an (1)

Ryūshin AZUMA

In 1920 Sakamoto Reishū (Kenichi), Japanese scholar, translated the Qur'an into Japanese for the first time. This title of the book is 'Kōran-kyō'. In this 'Kōrankyō', he translated the Qur'an by using the Buddhist terms. I am going to study this from the five points of view. As the prestage of this study, in this article I will consider (1) the Japanese translations of the Qur'an, (2) the concept of Buddhist terms, (3) the translation of 'The Qur'an' into the foreign languages, and (4) the life of Sakamoto Reishū (Kenichi)

### 目次

はじめに

日本におけるクルアーンの翻訳

「仏教語」について

アラビア語クルアーンの外国語訳について

『コーラン経』の訳者坂本龜舟(健二)のことば

## はじめに

一九九六年(平成八年)八月三一日から九月一四日までの一五日間、駒沢女子大学は、シリア、エジプト研修旅行を実施した。その詳細は、駒沢女子大学国際交流委員会による『駒沢女子大学・シリア・エジプト研修旅行』(一九九七年三月三日刊) B4判八四頁に収録されているから、ここに重複して述べることは避ける。

その間、九月四日、シリア・アラブ共和国のアレッポにある国立アレッポ大学に赴き、同大学と本学との学術交流に関する協定を締結し、さらに国立アレッポ大学学術交流日本センター(主幹 奥田敦氏)が日本の新潟県、国際大学中東研究所(所長 黒田壽郎教授)ならびに国立アレッポ大学アラブ伝統科学研究所の協力をえて、同研究所の講堂でシンポジウムを開催し、川竹和夫教授、黒田美代子助教授、アン・W・ヤング講師も、それぞれの立場で参加し、そのなかで、私は、「日本社会における仏教の軌跡——理論と実践——」と題して講演した。日本の仏教の学僧が、イスラームの国、シリア・アラブ共和国で仏教に関する講演を行ったことは、おそらくシリアの歴史およそ五〇〇〇年なかで最初の歴史的事件であったのではないかと推察され、同国のテレビ、新聞は、これを一斉にとりあげて報道した。

このとき、私は、はじめてイスラームに触れ、イスラームの存在の大きさに今更ながら驚嘆し、同時に、イスラームに関してなんの知識もない自分に思いつたのであった。

帰国後、私は、取り憑かれたようにイスラーム関係の書籍、文物そ

の他に関心を寄せはじめ、手あたり次第に求めていったのである。そこでいくつかの成果を得たのであったが、わけてもイスラームと日本の仏教、禅との関係については見るべき研究成果はないという発見であった。とくに、日本の仏教、禅からのイスラームへの接触は、ほとんどない。日本の仏教、禅とイスラームとは、いろいろな意味で、もっとも遠く離れている宗教であろう。

イスラームは、世界宗教といわれるキリスト教、仏教とならぶ三大宗教の一つとされる。ムスリムは世界人口およそ五〇億人のうちの五分の一すなわち一〇億人あまりといわれ、東南アジアのインドネシア共和国は世界で最大のムスリム人口を有するらしい。二一世紀はイスラームの世界だという人もいるくらいで、今後、イスラームの勢力は増大の可能性があるという。しかし、わが国ではあまりにも無関心でありすぎる。

私は、アラビア語には全くの門外漢であり、イスラームに触れたのは直前に述べたとおり、この二、三年このかたのことであるから、イスラームの知識はほとんどちあわせていない。

したがって、イスラームについてとやかく論ずる資格などまるでもちあわせていないことを自覚しているのではあるが、しかし、イスラームへの関心、興味はようやく深くなりつつあることを自覚しているのである。そして、イスラームに接近することによって、自分の抱いていた仏教、禅の知識や信仰をあらためて吟味、検討することになるという結果を導くことになったのである。のみならず、イスラームと仏教との諸問題も、ほんやりとではあるが眼前にうかびあがってきた

たのである。

そういうなかで、イスラームとのかかわりで見えてくる仏教、仏教とのかかわりで理解されてくるイスラームに関心はもっぱら集中してきている。本稿は、そのような関心の中から出てきた、きわめて小さな中間的まとめの一つである。

## 日本におけるクルアーンの翻訳

さて、標題の「わが国最初の日本語訳クルアーン」というのは、一九二〇年（大正九年）坂本蠡舟（れいしゅう）健二が訳した『コーラン経』上下二巻を指すのである。

これをとりあげるまえに、日本におけるクルアーンの翻訳状況についてとりあえずまとめておきたい。

現在、わが国では、日本人が手がけた日本語訳のクルアーンは、部分訳をもふくめて次の九種があることを私は知ることが出来た。以下に紹介を兼ねて列挙して、若干の解説を添え、本稿でとりあつかう最初の日本語訳クルアーンの歴史的位位置や特色を知る前段階としたい。

### 一、坂本蠡舟（健二）訳 コーラン経 上下（世界聖典全集第十四—第十五巻 大正九年（一九二〇）世界聖典全集刊行会刊

本書は、その凡例によれば「此訳本は、亜刺比亞文原本を坐右に備へしも、訳者の原語の知識に貧しきため、主としてセール、ロ

ドエル、パルマー諸訳本を参照して成れり。段落篇章に就きてはホエリー本に出でしアブヅル・カドルにも據れり」とあつて、アラビア語の原本を坐右に備えて、セール、ロドエル、パルマーの訳本を参考として翻訳したと述べている。換言すれば、本書は、アラビア語原本に依ったのではないのである。それでは、「セール、ロドエル、パルマーの諸訳本」とはいつたいどのような訳本か。鏡島寛之の「各国におけるコーランの翻訳」（『コーラン研究』所収）に、

「英訳コーランの最初に出たのは一六四八年より一六八八年にわたるアレキサンダー・ロス Alexander Ross の訳で、これは一六四七年の最初のフランス語訳であるデュ・リエの訳からの重訳であつた。しかし、ロスは元来全然アラビア語に通ぜぬ上にフランス語にも充分通じていなかったらしく、その訳はほとんど問題にならないものであつたといわれている。しかるに、その後、一七三四年に至りロンドン London でセール George Sale（一六九七年—一七三六年）の英訳コーランが現れた。この訳は重版また重版、非常に多くの版を重ね、英訳コーランの中で最も広く流布され、セールの名はコーランの名とともにいよいよたかまり、ことにイギリス東洋学の異彩ある一巨星デニソン・ロス Sir E. Denison Ross（一八七一年—一九四〇年）の賞讃の辞によって名声はいやまし、セールのコーランか、コーランのセールかの観を呈したほどである。すでにチャンドス古典叢書 Chandos Classics No. 30 中に収められており、一九〇九年以降エヴリマンズ・ライブラリー Every-

ymans' Library No. 380 中にも収められ、その他諸種の普及版が現れ、アメリカでも一八七八年フィラデルフィア Philadelphia で第八版を出しており、ロンドンでは一九二一年重修再版というごとく続々諸版が相次ぎ、いまもってなおこの英訳コーランの一般読者は絶えないらしい。

このセールの英訳はアラビア語原典からの直訳であるが、しかし彼はその訳及び註にあたっては、例のマラツチのラテン語訳本を常に参考したようで、そのほかコーランの註釈書として古来名のあるバイダーヴィー Baidhawī などをも参照し、一般に極めて述義的な訳法をとりその補足的事項をイタリック体で挿入している。セールはその翻訳に際してこのコーラン翻訳の解題論文 Preliminary Discourse 中に、「予は従来試みられた諸種のコーランの翻訳を忌憚なく批判したつもりであるが、しかし予の訳とてもなお万全は期し難い」とことわっているが、むろんこの訳も、今日のコーランの翻訳の水準からいえば幾多の欠陥や不備な点なきをえない。ことにその後、コーランの文献批判学的研究、その本文章節の年代的配列研究などの結果、ロッドウエルやベルなどの訳のごとく、主としてコーラン聖典の歴史年代的批判態度がその翻訳の上にも反映してきている現代の立場からは、すでに古典的意味しかもっていないかもしれない。しかしこのセール訳が現代回教学の先駆的業績としてもつ意義は決して没却せられないし、とくにその解題論文のごときも、それ自体、コーラン翻訳史論として相当の価値があり研究者にとっては今後長く貢献しうるも

のであらうと思われる。なおこの訳は、回教徒にもわかりやすからしめるためイスラム釈義 Makalat fi Islam と題されて英語から逆に現代アラビア語に還訳せられたものもあるという。

さて、次には一八六一年初版、一八七六年再版のロンドンおよびエジンバラ Edinburgh で出版されたキリスト教宣教師ロッドウェル Rev. J. Medows Rodwell (一八〇八—一九〇〇) の英訳コーランが知られている。これまたアラビア語から直接に訳され、セールの訳とならんでコーランの英訳としては最も代表的なものであるが、この訳の特色は、解題、訳註、索引のつけられているほかとくにコーランの本文のスーラ (章) が年代順に整えられて訳されている点にある。イギリスの回教学者だったマルゴリュウスはこの訳を評して、「その態度が学究的でしかもペダンティックでなく、細部に固執しすぎる感さえあるほど全体にわたり本来の効果を生かすように努めてその正確さを期している」として従来の翻訳中最も傑出したものと絶讃している。しかし、回教徒としてコーランの英訳を試みたインドのラホールのユスフ・アリーは、この訳に対して、「イデオムをわかりやすく訳そうと試みられているけれども、その註はコーランの本来の美しさを鑑賞せしめるとか解説するとかいうことよりも、むしろ主眼をいかにも自分の著作として、みせびらかすことにはばかり腐心するキリスト教宣教師一流の根情が自ら示されている」と批判している。しかし、いずれにもせよ、この英訳は最初のスーラ年代順の訳という点に特色が存するが、やはり一面、文章の時称や、接頭詞接尾詞などの

使用においてかなり不正確な点も少くないとの評も事実のようである。なおこの訳本もまた初版が相当数多く版を重ねて広く流布されている。この後、間もなく一八八〇年オックスフォード Oxford からパーマー Edward Henry Palmer (一八四〇年—一八八二年) の英訳コーランが出され、イギリスにおけるコーランの翻訳はまさに極盛期を迎えた。この訳は、イギリス東洋学の一結晶ともいいうべきマックス・ミュラー Frid, Max Müller (一八三三年—一九〇〇年) 監修の東方聖書 (The Sacred Books of the East) 叢書の第六卷第九卷にあてられ、コーランを兩卷二部に分ち第一部 (六卷) に一章より十六章までを、第二部 (九卷) に十七章より百十四章までを収めている。このパーマーは、その序文解題でセールの訳を余りに学究的で、その註もさして価値はないとし、その翻訳文章の効果もコーランのもつ力強さ、素朴性や簡潔性からかなりかけはなれてしまっていると評し、ロッドウエルの訳についてもその文体が余りに勝手に訳されているとして、専ら自分は素朴な自然さのある英訳をもって、ベドウィン・アラブ族の熱烈な修辭、語勢を再現するように努力したとのべている。しかしユスフ・アリーは、やはりこのパーマーの訳に対して、とくにコーランが俗語風に翻訳されねばならぬという考にとらわれすぎてか、かえってアラビア語原典のもつスタイルの美しさや莊嚴さを失ってしまったっていると評して決して高くは買っていない。しかし、この訳はともかくもアラビア語原典からの訳であり、解題、訳註、索引の便もあり東方聖書の流布と共に広く読まれ、一九〇〇年及び一九二八年には新

版も出されている。」としるしてあるのを見て、門外漢の私もおおよそのことを知ることが出来た。なお、坂本は、『コーラン經』において、随処に「可蘭<sup>コーラン</sup>」という表現をしている。一例をあげると「われ此可蘭<sup>コーラン</sup>に於て各種の譬喩の論議を種々に人に説けり、されど人多くは唯不信の爲に之を(受くるを)拒めり」(以色列品第十七)が、それである。コーランを可蘭と表記するのは、古蘭、香蘭と同様、後出するように中国のムスリムたちの用法である。この点では、坂本の『コーラン經』が中国のイスラームの影響下にあったことを示す証左と言えるであろう。

しかし、同時に一九二七年、中国語訳(漢訳)の鉄錚の『可蘭經』一卷(北京 中華印刷局刊)は、ロッドウエルの英訳クルアーン(二八六一年初版、一八七六年再版)とともに、坂本蠡舟の『コーラン經』を参照し、これにもとづいて重訳されたものだという見解(鏡島寛之前掲論文)があるのは、はなはだ興味ふかい。

二、有賀阿馬士・高橋五郎共訳 『聖香蘭經(イスラム教典)』一卷  
昭和十三年(一九三八) 聖香蘭經刊行会刊

私は、この『聖香蘭經』は所持していない。また、内容についても存知しない。関係方面に問い合せているが、国会図書館に貸し出し禁止本ではあるが存在していることを確認した。いずれ、機会をえて閲読したい。

「聖香蘭經」の香蘭は、中国におけるクルアーンの音訳語である。

おそらくこの中国の香蘭を採用したのであろう。

本訳については、前記の鏡島論文に

「日本における二種程のコーランの翻訳は実にこのような、まことに中半な回教認識の過程で試みられたのである。大正九年（一九二〇年）世界聖典全集に収められて東京で出版をみた坂本健一訳

「コーラン経」上下二巻がその最初のものである。これに次いで、だいぶ後、昭和十三年（一九三八年）に至り、同じく東京の聖香蘭経刊行会によって高橋五郎、有賀阿馬士共訳「聖香蘭経（イスラム経典）」一卷が出されている。両書ともにむろんアラビア語原典からの翻訳ではなく、専ら英訳本によって重訳されたものである。ことに

後者の方は底本となった英訳本がまた極めて杜撰なものであったようである。両方くらべれば、まだしも前者の坂本氏訳の方がよいが、いずれにしても、殆んど誤訳というよりも見当のつけようもない箇所がしばしば存する。後者の方は章節の分け方など何によったものかも殆んどわからないし、第一当時から訳が何を底本としたかを知りたいのであるが、実はそれさえ確実には解らないのである。後者の方の訳者の一人、故高橋五郎翁（本書刊行の少し前、物故された）生前中、かつて筆者は直接に翁より訳稿の一部を見せて貰ったことがあるが、すでにその稿は明治時代から着手していたものだと語られたが、ついに何本から訳されたかを聞くことはできなかった。なお高橋翁は世に埋れたままに不遇な生涯を終えられたが、最初のプルターク英雄伝の訳者であるばかりでなく明治における英書翻訳、とくに初期日本キリスト教の聖書翻訳史

上には忘れられない人である。なお、共訳者のもう一人、有賀氏もまた本来はクリスチャンであることを附記しておく。」

とある。アラビア語原本ではなく、あまり信頼のいけない英訳本に依ったらしいというのであるが、むろん私にはこのことを批評する能力はない。

ちなみに、有賀阿馬士と本訳本成立の事情および彼のイスラーム信仰の特長については、「昭和十三年（一九三八年）は、五月に東京モスクが開堂された年であるが、「イスラム教典・聖香蘭経」を高橋五郎（マコ）を共訳の形式で刊行された年でもあり、その発行所は笹塚（有賀氏の住居を指す。東註で、またそれより少し前に頒布された「聖ムハンマッド小伝」は高輪がその発行所になっている。また、これらの刊行物とあい前後して、非売品の小冊子である「日本イスラム教の説明」や「礼拝の手引」等は京都にあった長男鉄太郎博士（のちに神戸女子学院大学学長となる。東註）の烏丸鞍馬口の邸宅から上梓して、関係者に頒布されたものである。

こういう具合に、当時は今日のごとし適当なレンタルの貸ビルも少い上に、たとえあったとしても費用もかかるので彼は東京と京阪神にはそれぞれ自分の親族や親戚の自宅を伝道上の拠点としていた。このほか三女貞子の阪急宝塚線の蛍ヶ池もそうであった。実際そうさせざるを得なかったからである。

刊行物の印刷代も紙代も郵送費も交通費も何もかも自弁であった。どこからの援助も協力もない全くの独立独歩であった。すべて、これまで貿易や各種の事業で蓄積した財力によって賄われた

のであった。

強いて言えば「イスラム教典、聖香蘭經」(定価三円)のみは出版費として財団法人「蒙古善隣協会」から若干のバック・アップがあった。これは、当時の本部会計課長で、のちには総務部長や理事を歴任した彼の宗教者である野副金次郎がイスラームのもつ偉大さと威力を時の理事長大島豊(戦後東洋大学学長)に力説して、同機構内に従前の「蒙古班」と併設して「回教班」を現地で新設せしめたケース同様、いはば例外中の例外であった。」(小村不二男著『日本イスラーム史』昭和六三年 日本イスラーム友好連盟刊)

「いま一人はアフマド・有賀文八郎である。彼は一八六八年(慶応四年)に福島県に生まれ、一八九二年(明治五年)に貿易商としてインドのボンベイに行き、そこで多くのムスリムに接し、自身はキリスト教徒であったが、イスラム教の教義の簡明さ、信徒の純真な信仰に感動し、イスラム教の研究を始める。こうして昭和初年(一説では一八九六年)頃にイスラム教に入信したといわれる。

実業界を引退してからはイスラム教の布教に専念するが、一九三三年頃までに七〇名ほどの信徒をえたといわれる(小村不二夫、一九八九)。ちなみに、有賀は高橋五郎と共に一九三八年にコーランの邦訳(重訳)を試みている。これは坂本健一の訳業(一九二〇年)に次ぐものである。

有賀のイスラム教理解については、次のようにいわれている。  
有賀氏の所謂日本イスラム教は、日本人としての愛国的精神から出て居り、イスラムの本義を提唱するにあつて、その末節であ

る些細な戒律等は必ずしもアラビヤ人やトルコ人の奉ずるものに盲従しないのである。譬えば経文も、祈禱も日本語でやり、皇室を奉敬し、父母兄弟同胞の相愛を説き日本精神を中心にした進歩的回教を説くのである。勿論入信の式としても、割礼を行は<sup>な</sup>ないのである。(笠間晃雄、一九三九)

このユニークなイスラム理解は日本的ナショナリズムからきていることは明白であるが、それにしても戒律にこだわらない(反律法的)態度は、彼の以前のキリスト教信仰に由来するのか、それとも日本的宗教性によるのか、興味ある点である。」(中村廣次郎著『イスラム教入門』一九九八年 岩波書店刊)と評している。

最近、小滝透氏にいたっては、有賀文八郎の『日本イスラム教の道徳概要』は、「イスラームの律法遵守を骨抜きにしてイスラームを受容した」として、有賀をはじめとする「初期日本人ムスリムがいかにイスラームを捉えていたかがまことによく理解できる。彼らは、イスラームの何たるかを全く分かっていなかったのだ」と酷評している(同氏著『神の世界史 イスラーム教』一九九八年 河出書房新社刊)。

### 三、大久保幸次訳 邦訳コーラン(『コーラン研究』所収)

昭和二五年(一九五〇) 刀江書院刊

本訳は、第三章まで翻訳されていたが、以後の章については、

大久保氏の死去により中断されている。本訳を収録した『コーラン研究』は、大久保幸次、鏡島寛之師弟の遺稿集として、関係者が編集し、整理して、刊行した。「編者のことば」に、「邦訳コーラン第三章は回教圈研究所機関誌『回教圈』第五巻五号（昭和一六年）東註以下第八卷九号に至る二十四回にわたって発表された先生生涯の業績中最も重要なもので、コーラン邦語翻訳中比類なきものである」とある。

大久保は、「はしがき」で、「この翻訳に際しては、回曆一三三二年（西曆一九三三年）トルコ版アラビア語原典に依り、とくに回教徒の学者の手になれる」「諸訳書を参照した」と述べているから、本訳は、日本人がアラビア語原典にもとづいて日本語訳した最初のクルアーンということになる。しかし、私見によれば、その訳語には仏教語が多く当てられているから、その意味では、アラビア語原典からの忠実な翻訳とはいえないのではないだろうか。

#### 四、大川周明訳註 古蘭

昭和二五年（一九五〇）岩崎書店刊

本訳について、大川周明は、「序」に東京松沢病院に入院中「昭和二十一年初春に稿を起し、同二十三年初冬に至る約二年の間に成れるもの即ち是なり。訳出に当りては普く漢英仏独の諸訳を参照せり」と記している。

「古蘭」という漢字の訳語は、中国のイスラームを参考にして出

来たものではなからうか。一九三二年、中国回教徒互進協会が北京で「古蘭経訳解」を出版している（陳榮捷著『現代中国的宗教趨勢』中華民國七六年 文殊出版社刊）。中国におけるクルアーンの音訳語は、「古蘭」をはじめ「克蘭」、「香蘭」、「可蘭」、「苛蘭」、「古邏」、「克邏」、「克拉阿尼」、「古爾阿尼」などの用例がある（小林元著『回教』昭和十五年 博文館刊）。しかし、「その本文翻訳が実現されるに至ったのは二十世紀に入ってからのことである。尤も一説では漢訳の古蘭経二十巻がすでに清朝の末期、同治年間に出版されていた形跡も伝えられているが確かなことは知り得ない。」（鏡島寛之稿『各国におけるコーランの翻訳』昭和十五年）とあるが、今永清二氏は、その著書において、「『コーラン』は中国語では「古蘭」とか「天経」と書かれています。清代には「宝命真経」と題して出版されています。一九七二年、中国語訳の『可蘭経』が出版されています。清代の『コーラン』は、題名は漢語の「宝命真経」ですが、本文はアラビア語の木版印刷です。私はタイで、チェンマイの王和清真寺所蔵の『コーラン』を調査したことがあります。が、本文はアラビア語、表紙の扉の中央に「宝命真経」とあり、「至聖遷都壹千參百壹拾參年」（ヒジュラ曆一三三三年＝西曆一八九五／九六年）の刊行と記されています。（『東方のイスラーム』一九九二年 風響社刊）と記している。鏡島のいう「清朝の末期、同治年間」の「漢訳古蘭経二十巻」は、「宝命真経」とどのような関係にあるのであろうか。今永氏は、本書のべつのところで、「宝命真経」は全三〇巻で、中国の王和清真寺には、第二九巻のみ残っていると報告して



いる。

大橋健洋氏は、『大川周明——ある復古革新主義者の思想——』

(一九九五年 中央公論社刊)を著わして、『古蘭』翻訳にかかわる当時の大川周明の状況などについて次のように書いている。

「大川は白日夢の中で、しばしばマホメットと出会ったと言っている。こうした体験は病的症状にちがいないが、彼の眠れる宗教的関心と呼び覚ますのに役立った。イスラム教の聖典コーランの翻訳は、彼の三〇年来の宿題であった。大正二二・九三三頃、宗教学者の卵であった彼は、コーランの本邦初訳者たらんとして、大いなる学問的野心をもって翻訳に取り組んだ。しかし、この企てはアラビア語の必要から、最初は第三章、二度目は第九章までで中断し、以後その暇を得ぬまま放置されてあった。それが奇しくも発狂したことによって、実現することになるのである。彼は病院での暇つぶしに、昭和二二(一九四七年)三月一三日より翻訳に取りかかり、約一年九ヶ月間かかって、翌年一二月一日に訳了し、釈放後、昭和二五(一九五〇)年に、岩崎書店から『古蘭』として出版した。これはアラビア語の原典からの翻訳ではなかったが、英・独・仏・漢訳一〇種あまりを参照した日本で三番目の貴重な訳業であった。コーランが聖典である以上、大川自身が述べているように、少なくともアラビア語の読める信者でなければ訳者たる資格はないが、彼が詳細な訳註を付した『古蘭』は、完全な翻訳の出現を促す先駆的業績として「尊敬に値する」(「コーランとイスラム思想」)ものであった。

昭和二三(一九四八年)一月二日、いよいよ東京裁判の最終判決が下された。そして、一二月三日、東条以下七名の被告に対して死刑が執行され、その翌日、大川は晴れて釈放の身となった。彼は日記に次のように記している。

松井・板垣・土肥原・東条のために読経。善かれ悪かれ世界史の上に其名を残す。男子以て瞑すべし。釈放との知らせあり。兼子喜び居ることならん」。

管見によれば、本訳は、本訳以前の成果と同様に、随所に仏教語を以て訳出しているのを指摘することが出来る。その点、やはり問題が残るであろう。

##### 五、井筒俊彦訳 コーラン 上、中、下

昭和三二年(一九六二) 昭和三九年改訂 岩波書店刊

本訳について、井筒俊彦は、「はしがき」で、

「一 この『コーラン』口語訳にはいわゆるフリーユゲル版(*Conani textus arabicus*, ed. G. Flügel, ed. III, Lipsiae 1869)を底本として用いた。これは当時ヨーロッパきつての碩学<sup>せきがく</sup>として命名のあったグスタフ・フリーユゲル(Gustav Flügel)が厳密な校訂を加えて一八四一年に初版を出した最初の学術的テキストであって、今日に至るまで『コーラン』研究の基礎資料として西欧の学界にひろく使用されているものである。『コーラン』は、本文の字句の異同のほかに、各章ごとの節の分け方においても版によって大き

なひらきがあつて、例えば「第何章第何節」などと言っても、どの箇所を指すのか明瞭でない場合が非常に多い。今日、学術上の目的で『コーラン』の文句を引用する場合は、このフリーユゲル版の番号付けによることになっている。

一 『コーラン』の原文を書き写すアラビア文字は、点の打ち場所を上にするか下にするか、また点を一つ打つか二つ打つかによつて、例えば「汝ら」がすぐ「彼ら」になったり、「我々」が「汝」に變つたりするような可動性をもっており、その上、『コーラン』を書き写した最初期にあつては、そのような点も、またア・イ・ウなどの母音をあらわす記号も全然書かれなかつたものである。従つてそれをどう読むかということは、テキスト伝承の系統によつて相当の違いが出て来るのは当然のことである。そのような場合も、この訳書は全部フリーユゲルの本文の読みで統一した。

一 『コーラン』は回教徒にとつて何ものよりも尊い聖典であるから、古来その註釈は殆んど無数に作られており、各学派、各学者によつて語句の解釈に大變な差違がある。この口語訳は、原則として、ザマシャリー系統の代表的な註釈であるバイダーウィー(al-Baidāwī)の *Asyār at-Tanzil wa-Asyār at-Ta'wīl* によつて全体の基調を決定した。バイダーウィーは西暦十三世紀のコーラン学者、その註釈は回教の正統派では最上のものとして非常に尊重されて来たものである。しかしこの注釈書も、十九世紀以来長足の進歩をとげたアラビア文献学の今日の知識水準から見ると、無数の欠陥を蔵しており、すべての点についてこれに盲従するこ

とは到底不可能である。かくて、本書にはネルゲテ(Nadete)以後のヨーロッパのアラビア学の成果が随所に活用されている。しかし全体的に言つて、いかなる場合にも、あまり大胆すぎるような仮説は採用せず、できるだけアラビア語を良識的に、平易に、解釈するよう努力したつもりである。」と述べ、「改訳の序」で、「前の口語訳を出版して後約二年余り中近東の回教国を旅しながらも絶えずこの問題（理想的形に近付けるよう常に努力すること。」東註は私の念頭を去ることがなかった。

今度外遊の合間に数ヶ月の余暇を得て帰国することを得たので、この機会に全面的改訳の仕事に、難事とは知りつつ、ともかく手をつけることにしたのである。

この改訳は単に部分的な改竄ではなく、想を新たにして全部訳し直したものである。一番大切な問題である文体を、口語の枠内で徹底的に改めたのは勿論であるが、それだけでなく、今度アラブ諸国、特にエジプトのカイロで斯界の権威とされる多くの碩学と論議して得た新しい知識を基にして、語句の解釈も多く改めた。自分の理想とするところにはこれでもまだ遥かに遠いが、しかし或る程度の改良はできたと思う」と書いている。

藤本勝次氏は、本訳は、「井筒氏のすぐれたアラビア語の知識を駆使された正確な論文」に加えて、従来の文語体から「口語による新しい翻訳であることが特色」の「名訳と言え」と高く評価している（藤本勝次責任編集『コーラン』一九九四年 中央公論社刊）。

## 六、田中四郎訳 秘典コーランの知恵

昭和四七年（一九七二）実業之日本社刊

本訳について、訳者の田中四郎氏は、「あとがき」で、

「そこで私は、とにかくこの書物を日本語に訳すことを試みた。

コーランは九万九千四百四の単語と、三万二一三の文字を含んでいるといわれるが、その一点一画もおろそかにしないように努めたことはもちろんである。

しかし、私がいかにそのアラビア語を正確に訳しても、その原典に並ぶ文章の順序をそのまま日本語で並べたら、せっかくコーランを読み始めた人々も、おそらくそのほとんどが途中で投げ出してしまふことだろう。そこには同じ表現と似通った説明が、あまりにもくどくどとしつこく繰り返されているからである。砂漠の中ののんびり暮らしていた昔のアラビア人ならいざ知らず、気の短い日本人にはとても耐えられることではない。

そこで私は、書かれている語句の意味と内容により、それらを項目別に分けるといふ、いささか乱暴にみえることを試みた。一人でも多くの日本人にコーランを読んでもらい、そこに書かれていることを正確に知ってもらいたかったからにはかならない」と述べている。これによれば、アラビア語の原文にもとづき、その

一点一画を正確に日本語に訳したのである。項目別に分類し、整理してあるのでたしかに読みやすいが、クルアーンの原姿を知ることが出来ないうらみを残している。なお、奥付の著者略歴に

よれば、田中氏は、大阪外国語大学アラビア語学科を卒業、アラブ連合カイロ大学で学んだ人である。

## 七、責任編集 藤本勝次 伴康哉 池田修共訳 コーラン

一九七九年（昭和五四年）中央公論社刊

本訳は、藤本勝次氏によれば、解説の「コーランとイスラム思想」に、

「本巻の翻訳に用いた底本は、一九二三年に刊行された「標準エジプト版」に準拠した『コーラン』である。そこで、節番号のつけ方は、いわゆるフリーユージェル版（二八三四年刊）とは相異なるが、最近の学術的著書や論文は、このエジプト版を用いるのが一般的になっている。

翻訳はできるだけアラビア語に忠実に行ない、なるべく補筆しない方針をとった。訳注も個人的解釈をさけるために最小限にとどめた。必要な箇所訳注は、最初に出てくる語だけにつけてあるから、索引によって検索していただきたい。アラビア語の転写法は次の通りとした。

（語頭省略）b, t, th, j, h, kh, d, dh, r, z, s, sh, s, d, t, z, gh, f, q, k, l, m, n, h, w, y, ta marbūta は省略。

第1章から第25章、第93章から第114章は伴康哉、第26章から第92章は池田修が翻訳を担当した。」とあって、一九二三年に刊行さ

れた「標準エジプト版」のアラビア語のクルアーンに準拠したものである。伴、池田両氏は、大阪外国語大学のアラビア語専攻の語学者である。本訳について、イスラーム文化協会アバクル森本武夫会長は、「その訳文が極めて読み易い、臭味やいや味の無い明快簡潔な文体」であり、氏が一九七七年六月、中央アジアのタシケントのイスラーム図書館を訪れたとき、世界各国語に翻訳されたクルアーンの収集のなかに、日本語訳クルアーンとしては、本訳がただ一冊あつたとのべている（森本武夫稿「聖コーラン日訳の歴史」『アッサラーム』No.9 一九七七年 イスラミック・センター・ジャパン刊）

八、宗教 日本ムスリム協会 注 日亜対訳 聖クルアーン

昭和五十七年（一九八二）改訂版 日本ムスリム協会刊

本訳の元版は、昭和四十七年（一九七二）日本人ムスリム三田了一氏（日本ムスリム協会会長）がアラビア語の原文にもとづく本格的な日本語訳クルアーン『日亜対訳注解聖クラーン』（日訳クラーン刊行会刊）のアラビア語の原文に関する若干の不備な点を改訂して、世界イスラーム連盟の校正にもとづいて、校正を行い、若干の注を添え刊行したのである。これに関連して、今永清二氏が、その著『東方のイスラム』（一九九二年 風響社刊）で、「広島在住の私がもう一つこれにつけ加えさせていただきますと、イスラムの聖典、これはいうまでもなく『コーラン』ですが、その翻訳に二冊、広島で印刷出版されたものがあります。この『コーラン』は日本ムスリム協

会という宗教法人が刊行した、三田了一さんの翻訳になるアラビア語との対訳の『日亜対訳 注解 聖クラーン』（昭和四十七年刊）と、日本語訳だけの小さいコンパクトな『日訳注解 聖クラーン』（昭和四十八年刊）です。三田さんはかつて満鉄の調査部に務めていましたが、最後はイスラムに改宗されました。私も何度かお会いしたことがありますが、広島にもお見えになっています。そして、この二冊は奥付をみますと、印刷は広島市の「たくみ工房」と記しているのです。このことから、印刷は広島市の間に縁があるといえるのであります。」と述べているのを紹介しておく。ともあれ、この『日亜対訳 注解 聖クルアーン』は、内外のムスリムたちに公認された本格的な日本語クルアーンであるということになろう。原訳者三田了一氏は、本訳の「聖クラーンの訳注について」のなかで、

「八、本書の訳注については、畏敬するパキスタンのハフィズ、故アブドウル・ラシッド・アルシャッド氏の講義を基礎にした。氏はとくに本書のために、メッカのカアバの聖殿において、1963年12月から満二個年余にわたり、毎日あかつきの礼拝後、およそ一項ずつ一字一句を克明に解説し、一応全巻の講義は終わったのだが、不幸にして氏の急逝「きゅうせい」のため、それは当時完成するに至らなかった。

その後本書の執筆にさいしては、内外の多くの既刊の翻訳書を参考したが、原典の本文についてはマウラナ・アブドウル・マールジド氏の英亜文対訳書に負うところ多く、また注解の方は主とし

てA・ユスフ・アリ氏の英亜文対訳書によった。

長年にわたる本書の執筆中、同胞の親身な協力援助はたいへんなもので、あるいは疑問の点につき、メッカの諸権威者の意見をまとめたうえ説明をなし、あるいは校訂委員会を組織して、それぞれの自国語の訳書と対照して十数個月にわたり全巻に厳密な検討を加え、またこの道の先達内藤智秀博士そのほかの方々の校閲をたまわり、またラビタの権威者からなる委員会の校閲にさいしては、同僚のサーレ・M・サマライ博士と鈴木絃司氏の協力により、全巻の仕上げの仕事を全うすることができたなどはその顕著なものである」と述べて、本訳成立の事情を明らかにしている。

次に、改訂版の成立については、日本ムスリム協会会長五百旗頭陽二郎氏らの「本改訂版の改訂手順」をみると、まず、

#### 「1) 原版のアラビア語訂正

世界イスラーム連盟(ラービタ)より原文アラビア語の不備な点を指摘された事により、原文テキストをカイロ・アズハル版に変更し、アラビア語を理解する当協会関係者及び森伸生氏(現在マツカに留学中)により全面的な版下の作成作業を行った。

#### 2) アラビア語テキストの校正

アラビア語テキストの版下作成(割付け)が終了した事により、校正刷を世界イスラーム連盟へ持参し校正を依頼した。

#### 3) アラビア語テキストの訂正

世界イスラーム連盟の校正に基づいて、アラビア語のテキストの訂正を行った」とあり、

#### 「8) 邦文の平易化、現代語法による統一

和久井生一先生に依頼して、対訳全体を通じてチェックしていただいた。その際に内容上の疑問点をも御指摘いただくと共に、何よりもまず若い世代の人々に抵抗なく読んでいただけるように、且つまた高齢の方々にも読みやすい日本語に統一していただいた。

#### 9) クルアーン(アラビア語テキスト)の最終チェック

アラビア語と対訳との頁合せ及び対訳の最終校正が終った時点で五百旗頭陽二郎氏と有見次郎氏(当協会理事)が仮製本された本改訂版を世界イスラーム連盟へ持参して、原典テキストの最終チェックを得た」などとするしてある。

くりかえすが、本訳は、日本人ムスリムが日本語に訳したわが国最初の本格的なクルアーンで世界ムスリム連盟の公認を受けた権威あるものということになろうか。

ところで、ムスリムと非ムスリムとの相違はどこにあるか。この点について鏡島寛之の前掲論文によつてうかがってみると、鏡島は次のように言っている。

「同じコーランの英訳であってもヨーロッパの非回教徒の手になる訳(それがたとえ回教でないアラビア語の専門学者のものであっても)、回教徒自身の手になるそれとは、自ら異なるところがなければならぬのは当然である。回教徒は同じ英語による翻訳であっても、そこに自らの回教徒としての思想的立場や主観がコーラン英訳を通じてにじみ出てくるのは、むしろ自然のことといわねばならぬ。

が、さらに同時に、コーランの翻訳に際してはその内容、回教教理や行事、戒律や伝統を自ら回教徒として経験し、実践しているでなければ、その充実な解釈、翻訳表現ということは望まれない。このことは事実、われわれが、たとえば、パーマーやセールやロッドウェルなどの英訳コーランでは遂に見出されないものが、ムハンマッド・アリーやユスフ・アリーの英訳コーランでは、明確に指示され解説されていることによって率直にこれを認め得るのである。かような点を初めとして、回教徒の英訳コーランには幾多の回教徒ならでは見られない独特の長所、優位性が見られるわけである。実際、ヨーロッパの非回教徒の初期の英訳には、訳者自身がクリスチャンであるため、ことさら回教とキリスト教、ユダヤ教との関係深い章のごときは、あえて意識的に回教の本義を歪曲し誣している傾向も少くない。こうした点を思い併せれば、回教徒自らの手になる英訳コーランの優位性は、さらに高く評価さるべきであろう」

九、アリ・安倍治夫訳 日・亜・英 聖クルアーン

一九八二年（昭和五七年）谷沢書房刊

本訳は、有賀文八郎、三田了一らとおなじく日本人ムスリム、アリ・安倍治夫氏が朗誦に適する肝要な三八章をえらび、これをアラビア語の原典から訳出し、英訳（世界イスラム連盟「ラビタ版」）を訳文に併記した。訳文については、専門の立場から、池田修、中村

廣次郎両氏の校閲を経て、決定稿が出来た。すなわち、安倍は、「訳者あとがき」で、

「ドクター・シャオキのお勧めもあつて私が聖クルアーンの和訳という

身のほど知らずの 大事業に挑んだのは

今を去る 四年前のことだった

一年目は アラビア語の独習で

あつという間に 過ぎ去り

二年目は 初稿の作成にあけくれ

稿を改めること 四たびをこえた

アラビア語にすぐれた 同志の人々が

訳稿を吟味する 研究委員会を組織し

一行一行、詳しく検討して下さった

こうしてできた 最終稿を

池田、中村両教授の 御校閲を経て

決定稿に括めあげたのは 一年前のことだった」

とのべている。また、宗教法人日本イスラム教団アル・ハッジ・ドクトル・シャオキ二木秀雄総裁は、「日・亜・英対訳 聖クルアーンの刊行にあたって」という一文を寄せて、「本書の日本語訳は、日本イスラム教団専務理事安倍治夫氏の手をわずらわせたものである。

数年前、わが国におけるダウワ（宣教）活動のため、易しい朗誦用クルアーン刊行の必要性が叫ばれるや、氏は進んで、みずから

アラビア語を初歩より習得され、牛の歩みにも似た着実さをもって、一年余りのあいだに五たび訳稿を改め、本書のために読み易いクルアーンの訳業を完成された。

訳文の選定にあたっては、英訳・中国語訳はもとより必要があれば、独・仏の訳語をも参照され、疑問があれば専門家の門をたいてタフスィール（アラビア語によるクルアーンの注釈書）の所説のうち、もつとも標準的なものに準拠する努力をもおしまれなかったと聞く。ここに氏の御苦勞を多とする次第である。

終わりにあたって本書の訳文について、専門の宗教学的および言語学的立場から懇切なる御校閲を賜った東京大学助教授中村廣治郎および大阪外国語大学教授池田修の両先生に深く謝意を表するとともに、訳者を中心に結成された当教団のクラーン研究会に積極的に参加され、それぞれの立場から本書の刊行について御指導と御激励とを賜わった、ナビール・アッバス、オスマン・イマーム、ファドル・アッラー・チャン（張）、アシュラフ安井およびアブドル・カリーム仲村の諸氏に対しても、あつく謝意を表明したい」と述べている。なお、一九九八年六月十二日付の安倍治夫氏の書簡によれば、氏は、近く完全な日本語訳クルアーンを出版の予定であるという。

## 「仏教語」について

次に、本論に入るまえに、標題の「わが国最初の日本語訳クルアーン」に続く「仏教語」について、あらためて確認をしておかなければ

ならない。

結論を先まわりしておく、本稿の「仏教語」とは、仏教に由来する、ないし仏教に関するところの用語、術語を指して「仏教語」という。いま仏教とは、仏、法、僧の三宝を指す。三宝は、仏教が歴史的、社会的に具体的に存在する絶対的な条件である。この三宝のなかで、「仏教語」は、法すなわち法宝の範ちゅうに属するであろう。即ち、中国仏教、日本仏教において漢字で表記される法宝である。そして、この場合、法宝は、具体的には、經、律、論の三藏に相当する。

おおよそ以上のとおりであるが、以下、この点について補説しておきたい。

まず、『仏教語大辞典』（中村元著 昭和五〇年 東京書籍刊）と『例文 仏教語大辞典』（石田瑞麿著 一九九七年 小学館刊）は一般にも知られるとおり、広く普及している代表的な仏教語辞典の一つであるが、この両書には、仏教語の項目はないが、仏語の項目はある。

『広辞苑』（新村出編 第三版昭和五八年 岩波書店刊）、『岩波 国語辞典』（西尾実ほか編 第三版一九八四年 岩波書店刊）にも仏教語の項目はない。しかし、仏語の項目はある。本稿でいう「仏教語」は、この仏語のことである。仏語は、フランス語をあらわしてまぎらわしい点があるので、いま仏教語というのである。

そこで、参考までに、右の四書に示す「仏語」の項をあげておく。

### 『広辞苑』

① 仏の教えたことば ② 仏教に関する語

『岩波 国語辞典』

仏教の用語、更に広く、仏教に由来する語。▽「ふつこ」と読めばフランス語のこと。

『仏教語大辞典』

①仏の説きたもうたことば。仏のことば。仏の教え。②仏教に関する術語。

『例文 仏教語大辞典』

仏の説いた言葉。仏の教え。また、仏の教えに関する言葉。※伝光録―上・八「仏に二種の語なし。故に仏語をみるは、仏身をみるなり」

つぎのべておきたいことは、仏教は、およそ二五〇〇年のむかし、釈尊を教主としてインドにはじまり、ほとんどアジア全域に伝播し、今日では、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカにも浸透しつつある。仏教教団において、釈尊(三寶のうちの仏)の滅後一〇〇年ごろまでに経、律の二蔵が成立し、その後、論蔵が成立し、紀元前一〇〇年ごろから、経、律、論の三蔵(三寶のうちの法)という用語がととのったとされ、この三蔵が僧伽(三寶のうちの僧)によって伝承されるわけである。

けだし、仏教はバラモン教社会で成立したが、この仏教以前のバラモン教などの用語や概念も、時として仏教の中にとりこまれたり、転用されたりすることがあって、仏教に対する曲解、誤解が生ずることがある。

釈尊は、古代インド語のパーリ語で、インド、マカダ地方を中心に説法、教化したとされる。サンスクリット語(梵語)は、パーリ語が俗

語すなわち民衆語であるのに対して、標準語、文章語であるとするのが通説である。このパーリ語、サンスクリット語は、東南アジアの仏教で今日ももちいられている。一方、主としてサンスクリット語であらわされた仏教は、チベット語によってチベット仏教となり、またシルクロードを経由して中国大陸に伝来され、漢字、漢語などに翻訳されてさらに朝鮮半島、日本列島にもたらされた。この場合、たとえば、中国で仏典が漢字、漢語などで翻訳される場合、中国固有の儒教、道教の用語に依存することがある。相互に影響を与え、仏教が中国的に変質、変貌することもある。このような傾向のなかで、とくに「漢訳仏典を理解するのに老莊思想を媒介としたり、老莊思想を習合させて説明する風潮」を「格義仏教という」(鎌田茂雄著『中国仏教史』一九七八年岩波書店刊)のである。そして、この格義仏教が日本に輸入されて、さらに、インド仏教、中国仏教が、日本固有の宗教的観念や感性によって受容されることもある。仏教は歴史的、社会的条件を超えた普遍性と永續性を標榜する宗教であるが、特定の歴史的、社会的条件のもとに形成されている現実の具体的な面を無視出来ないものである。この矛盾する両極の緊張関係において仏教語もうけとめられることになるであろう。したがって、本稿で「仏教語」と言っても、仏教に由来し、ないし仏教に関する用語、術語のほか、仏教独自の趣旨が定着している根柢は必ずしも明らかではないが、仏教的な意味をになわされている例までも含めて考慮しなければならないであろう。

なお、補足して言えば、本稿の「仏教語」は、特定の宗派、学派の特別、特殊な語句ではなく、広く一般に出まわっている、例えば先述



の四種の国語辞典や仏教語辞典などに掲げられていて、その志しさえあれば容易に入手し理解出来る範囲の語を指すのである。

### アラビア語クルアーンの外国語訳について

アラブ人ではない、そして、アラビア語を解しない異教徒の私などが、クルアーンに近づくにあたつて、あらかじめ承知しておかなければならないことが、二、三あることを知った。この点について整理しながら、私見をメモしておきたい。

そもそも、イスラームのクルアーン一四章は、伝統を重んずるムスリムにとつて唯一、絶対の啓典であるということである。

さて、そこで、第一に、クルアーンは、アッラーの啓示であるから、神聖であり、絶対であつて、アラビア語以外の言語に翻訳することは不可能であるし、翻訳してはならないのである。その理由は、要するに、クルアーンは、一語一語、アッラーがアラビア語で語ったのである、それゆえ、異教徒のことばになおすことなどアッラーに対する冒瀆である。アラビア語は、人類のことばである。また、クルアーンとは読誦を意味し、もともと声高く朗読するものであつて、その音調はアラビア語独特の魅力である。また、クルアーンのアラビア語は、一語で多義を含む深遠なものであるから、容易に他国語におきかえられないなどなど。こういうわけで、門外漢にとつて、クルアーン即アラビア語、アラビア語即クルアーンと言つてよいような印象すら抱かせる点がある。

『コーラン』の原語「クルアーン」Qur'ānとは、もと読誦を意味した。この聖典は目で読むよりも、文句の意味を理解するよりも、何よりも先にまず声高く朗誦ろうしやうされなければならない。考えて見るともう一昔も前になるが、始めて本格的な「カーリウ」(コーラン読み)の朗誦を聴いた時、僕はやつとこの回教という宗教の秘密がつかめたような気さえたものだ。オペラのアリアを歌うテノールかソプラノのような張りのある高い声、溢あふれる音量の魅力、一語一語の末までも沁しみみ渡って行く、いかにもオリエンタルという名の連想にふさわしい深い哀愁しみじみの翳かげり。日常茶飯事さはんじを話題としてもどこことなく荘重で、悲劇的な色調しきちやうをともしれば帯びやすいアラビア語こそ、こういう聖典には正にうつつけの言葉なのである。

ごく最近まで、アラビア以外の回教諸国では、『コーラン』の翻訳とすることは禁止されていた。意味が分かつては分かつても、信者はアラビア語の原文のまま『コーラン』を読まなくてはならなかった。しかしこれは決して単なる宗教的頑迷がんめいといったものだけではなく、それ相当の理由があつたわけである。今から約十二年以前、といえば丁度戦争が真最中まっさいちゆうのことだが、カイロの大学からやって来たある回教法学の先生が僕に言つた、『コーラン』を翻訳してはいけない。それは宗教法に違反する。だが日本語による解説くわんせつということにして出版すればよい、と。随分形式的なことをいう人だ、とその頃僕は感じたものだったが……

こんな次第で、『コーラン』を他国語に訳すということ自体が、むずかしい宗教法の理論からすれば問題なわけだ。(中略)

一般に『コーラン』の文体が我々の耳に与える印象がきわめて莊重で莊嚴であることは先刻書いた。それから、その印象が根本的にはアラビア語という言語そのものから来る特徴であることも。だがそれだけではない。実は『コーラン』には特殊な文体上の技巧が非常に上手に使用されているのである。この技巧、乃至技術は人為的には仲々真似のできるものではない。

マホメットが出現する以前、古代アラビアの砂漠には「カーヒン」と呼ばれる特殊の人間がいて、普通の人間と、目には見えぬ精霊的世界との仲介者の役をつとめていた。カーヒンとはヘブライ的に言えば予言者であつて、我々にもっと身近な古代中国で言えば巫者に当り、多くの古代民族や未開民族の間におけると同様、これがアラビアでも絶大な勢力をもっていた。ところでこのシャマン的性格の人物は、大抵の場合、自分でそれを欲するわけでもないのに——『旧約聖書』の予言者アモスの激烈な召命体験の叙述を見て戴きたい——突然、何者か見えざる精霊的な力にとり抑えられ、自分の意識を失つて自分ならざる「何者か」の言葉を語り出す。

古代アラビアのカーヒンが、このような神憑りの状態に入つてものを語り出す時、それは必ず一種独特の発想形態を取るのを常とした。この文体をサジュウ sagi という。「サジュウ」体とは、ごく大ざっぱに言つて見れば、まず散文と詩の中間のようなもので、長短さまざまの句を一定の詩的律動なしに、次々にたたみかけるように積み重ね、句末の韻だけできりつと締めくくつて行く実に珍しい発想技術である。これがまた、凜冽たる響きに満ちたアラビア語という言葉にぴたり

と合うのだ。著しく調べの高い語句の大小が打ち寄せる大波小波のうにたたみかけ、それを繰返し繰返し同じ響きの脚韻で区切つて行くと、言葉の流れには異常な緊張が漲つて、これはもう言葉そのものが一種の陶酔である。語る人も聴く人も、共に妖しい恍惚状態にひきずり込まれるのだ。

こんな異様な文体が『コーラン』の文体の基礎をなしている。そしてこのことは直ちにまた、『コーラン』の内容そのものに関してもある重大な示唆を与えるのである。何故にマホメットはその教説を伝統的な神霊的言語形式に託したのか？　いうまでもなく、彼が説き弘めようとする事柄そのものの性格がそれを要求するのではないか。

神憑りの言葉。そうだ、『コーラン』は神憑りの状態に入つた一人の霊的人間が、恍惚状態において口走つた言葉の集大成なのである。だからそこに説かれているのはマホメットの教説ではない。マホメットではなくて、マホメットに憑りうつた何者かの語る言葉なのである。その「何者か」の名をアッラー Allah とする。唯一にして至高なる神の謂いである（井筒俊彦訳『コーラン』上 一九九五年 第45刷 岩波書店刊）

「正統派イスラムの伝統的な考えでは、コーランは「神のことば」そのものであり、神から直接下された啓示であつた。そこには人間的要素は全くなかつた。マホメットは歴史の人間ではあるが、コーランはそのマホメットのことばではなく、マホメットを通じて人間に示された「神のことば」なのである。すでに述べたように、「創造されたコーラン」説に対する正統派イスラムの反論として、コーランが読誦される時の音声として現れるかぎりにおいて、コーランは時間の中に造

られたものではあるが、「神のことば」としての意味・内容については、時間・歴史を越えた永遠のものであると主張された。

このようなコーランが、「神のことば」であり、啓示であり、歴史を超越した永遠のものであるという確信は、近代イスラムにも通じて言えることで、いかに急進的なイスラム思想家も、コーランの持つそのような性格を疑うことはけつしてなかった。したがって、コーランそのものに対する批判は許されるはずがないのである。近代イスラムにおいてでも、コーランの歴史的研究が発展しないのは、このようなコーランの超歴史的性格の確信のためである。」（藤本勝次編『コーラン』一九九四年 中央公論社刊）「今日、ムスリムの間では、コーランは何よりもアラビア語で神が語った言葉をそのまま一字一句誤りなく忠実に記録したものと信じられている。したがって、コーランとは何よりも「アラビア語のコーラン」であり、それを別の言語に翻訳したものはもはや神の言葉ではないとされる。」（中村廣次郎著『イスラム教入門』一九九八年 岩波書店刊）『クルーアーン』の内容、文体の混然とした美しさは、アラブもしくはアラビア語に精通した人々、とりわけ信者たちにとっては比類ないものであり、多くの詩人たちがこれに比肩するものを書こうと挑戦したが不可能であったことが、この神聖性の一つの証拠とされるほどである。」（黒田壽郎編『イスラーム辞典』平成五年第五版 東京堂刊）「コーランは神が一人称で語ったそのままの言葉として、いっさいの人間の言葉から区別され、したがって集録に際しては人間による文学的作為はすべて排除された。ここによくいわれるコーランの「読みにくさ」、あるいは伝統的に「翻訳」を拒否し、かたくなにアラビア語のコーランに固

執しようとするムスリムの態度にみられるコーランの特異性がある。」（『イスラム事典』一九八九年第8刷 平凡社刊）「イスラームにおいては、諸宗教行事には原典のアラビア語によって営み、クラーンを翻訳することは由来許されなかった。」（日本ムスリム協会『聖クルアーン』昭和五七年 日本ムスリム協会刊）

くりかえすことになるが、アラビア語は、クルアーンの言葉として、その権威というか特長を保ち、そのために、ムスリムたちによって、アラビア語は最高の共通語であるようで、森本武夫は「人類の言葉アラビア語」（同氏著『イスラーム入門』一九八四年 第一法規刊）としている。『イスラム事典』では、このへんの事情を「今日のアラビア語圏はアラビア半島全体、シリア・パレスティナ、イラク、タウルス山地とクルディスタンの一部、エジプト、スーダン、北アフリカを包含する。アラビア語はコーランの言語であるために文法を固定し、歴史を通じてその変化は許されないという運命をたどってきた。しかもアラビア語はこれを母語とするアラブの言語という地位にのみとどまるものではない。コーランがアラビア語で書かれており、イスラムの信者はアラビア語で礼拝するように義務づけられている。したがってアラビア語は全世界のムスリムの宗教語であり、イスラム世界の学術語としての地位を占めた。イスラム文化がアラビア語文化だとさえいわれるのは、非アラブのムスリム学者もその研究成果をアラビア語で発表してきたからである。アラビア語は、全ムスリムに対し、精神的一体感を植えつける機能をもった。」としている。

昭和一三年（一九三八）、回教圏研究所の委嘱によって、小林元（財団法

人中東調査会小林氏を中心とする中東研究グループによって一九六〇年に成立した」は、「満支蒙」すなわち今日の中国東北部、中国、ウイグル各地の回回（ムスリムの異称）を視察し、遍歴した。その記録が『回回』（昭和十五年博文館刊）として一書にまとめられた。本書は、いまや稀購本となった観があるが、ここに、当時の彼の地のムスリムたちとアラビア語との深いかかわりに関して述べてある。やや長文にわたるかも知れないが、この状況はおそらく今日も変わっていないだろうと思われる。参考までに転載しておく。

「満支蒙の回教徒たちもかれらが回教に帰依しているかぎり、多かれ少かれアラビア語を理解してゐる。なんとすれば、アラビア語はコーランの言葉として、いはば神聖な言語として、回教圏の国際語であるからである。じじつ、回教徒たちは宗教的勤行ないし信仰に関係する諸行事の場合はいふまでもなく、なおまた日常用語、たとへば相互の挨拶などのさいにも、原則としてアラビア語を用ひてゐる。それはトルコ人でも、イラン人でも、マレイ人でも、漢人でも、だいたい同様である。ただトルコ人やイラン人などの場合は、かれらの国粹的民族主義の立場から、トルコ語やイラン語などを使ふかもしれない。

しかし、いっぽんに、満支蒙の回教帰依者たちのあいだでは、アラビア語が通用する。かりに、満支蒙の回民らでさへも、かれらはアラビア語で挨拶するであらう。すなはち、一方のものが「按賽才爾目挨爾來昆」、すなはち漢語風に表はせば「主賜安寧、是在你們上」あるひは「主賜你們平安」といへば、他方のものは「我挨爾來枯悶賽才爾目」、すなはち支那語的に訳せば「主的安寧、在我們上、也在你們上」あるひは

「主也賜你們平安」と答へるのである。

なお、満支蒙の回教徒らがつねに表白する二三のアラビア語的表現を示さう。たとへば、アルラーフを讃仰するために、かれらは「按拉胡艾克白雷」、すなはち漢語訳を與へれば「眞主至大」あるいは「主是至大的」という言句を、回教的題目すなはち讃聖として唱へる。また、かれらはアルラーフに対する讃念の言葉として、「比司抵爾席賴黑爾媽賦來黑爾迷」、すなはち支那語風に表はせば「憑普慈特慈、主的尊名起」といふアラビア語を用ひる。ただし、この聖句はコーランの神聖な発句であり、主讃の意味をもつてゐるために、回教信奉者たちはかれらのあらゆる行動の冒頭辞としてつねに誦するものである。また、かれらはかれらの信仰を表白する場合には、「爾宜爾孩印爛拉胡木汗爾挨埋堵來蘇論拉席」、すなはち支那語的に反訳すれば「（一切）萬物非主、唯有眞主、穆罕默德、是主的欽差」という念眞の辞、いひかへれば回教的標語を口誦するのである。

かやうに、満支蒙の回民たちもまたアラビア語に親しんでゐる。いな、かれらはアラビア語のそれぞれの聖句を暗誦しなければならぬのである。じじさい、回教寺院に附屬する学林は、アラビア語を阿文もしくは経文もしくは回教文の名において教授してゐる。さらに、他の回民関係の小学堂でさへも、それを学習せしめてゐるほどである。したがって、理論的にいへば、満支蒙の回民らはなんらかのアラビア語的知識を享有してゐるべきである。さうして、アラビア語の使用を通じて、われわれは回教徒たちの国際的團結を認めることもできる。わたくしが満支蒙の回教的巡礼において、いつもアラビア語的けひ

に接することができたのも、あきらかに、この事情にもとづく。

それで、わたくしが回教徒たちに向って、アラビア語風の挨拶を語ったとき、たとひそれが初会の場合であつたとしても、かれらは急にわたくしに対して親密の態度を示すのがつねであつた。これは決して偶然な現象ではない。それは回教圏において共通する交驩風景である。アラビア語の威力！ たしかに、言葉は魔術的である。回教とアラビア語とのあひだには、それこそ、「見えざる糸」がある。これは回教が仏教やキリスト教などといへんちがふところであらう。さうして、回教徒問題の研究者がアラビア語を習得しなければならない理由は、ただこの点からだけでも明瞭となるにちがひない。」

第二に、たとえば「アラブ以外のイスラム教徒の民族意識が高揚するにつれ、イスラム諸国内でアラビア語以外のことはへのコーランの翻訳が行なわれるようになり、またヨーロッパ諸国のイスラムに対する関心が強まるのにもなつて、ヨーロッパ諸国での翻訳も行なわれるようになった」（前掲藤本勝次氏論文）ことによつて、現在、クルアーンがアラビア語以外の言語に翻訳されている事実が認められる。ただ、翻訳してはならない、ないし出来ないアラビア語のクルアーンを外国語に翻訳しても、それはアラビア語原典のクルアーンの意識ないし解説、解釈にすぎないというのである。

「しかしイスラム圏が長年外国の植民地下におかれた関係もあつて、早く、西欧のイスラム学者により英・仏・独語に訳され、また近年になつてインド・パキスタンの権威ある信徒によつて、英訳のクラインが刊行され、トルコ・中国・ビルマその他の国々においても、それ

ぞれの国語による訳書が、続々刊行されるに至つた。しかしアラビア語の音調からくる魅力や、一語で極めて広い意味をもつクラインの語を、外国語に翻訳することは不可能である。それで信徒による訳書は、クラインの意識と題するのが普通である。

クラインの理解には、聖予言者<sup>(マヤ)</sup>の直接の教示、そのの、サハバ<sup>(アッバ)</sup>（聖予言者の同僚）たちの理解すなわち古来行われている解釈による習わしになつている本釈注もこの原則に従つた。しかしわが国において日常使われている語句。たとえば身を殺して仁をなすというような場合、ほんとうに自分を殺害するというような、表現には従わなかつた。また事情により例外的に、新しい解釈であることを明示して、旧来のそれと併記したものもある。」と、三田了一は述べている。（前掲「聖クルアーン」）

「ムスリムは、『クルアーン』を、預言者ムハンマドを通じてアラビア語で下された神の言葉であると解釈している。したがつて他の言語への翻訳は、すでに啓示そのものとはかけ離れたものであり、意味の解釈にすぎないとする」と黒田壽郎も述べている（『イスラム辞典』）。

そうは言うものの、たとえば日本語訳のクルアーンがそれぞれ体裁、訳語がちがうのは、より正確でわかりやすいクルアーンを目ざしてあらゆる努力が払われた結果であらうと理解するものである。

第三に、以上の二点は、伝統的ムスリムのクルアーン観と言ってもよいのではなからうかと思われるが、近代イスラムにおいては、混乱する現代を救済する指針を与えるクルアーンの内容が問われているという点である。

すなわち、藤本勝次教授の「近代イスラムにおいては、コーランの

奇跡はその文体や表現の美ではなくて、コーランの意味の永遠性、つまり神の「導き」(hidaya)が時間・歴史を越えて現代にも生きていて、近代人の実践の指針になっていることを強調している。コーランが与える神の導きこそ、コーランのもっとも特色ある性格と考えられる」(ムハンマド・ジブリー・ヌウマーン)とか、「その主要な目的は、人間の尊厳の完成である」(バルウェズ)といったことが、近代イスラムのコーランに対する基本的な態度とみることができる。

したがって、コーランはもはや「読誦するもの」だけではなく、現代の問題解決への指針でなければならない。それはイスラムの近代主義者カスラヴィーの「コーランは現代に生きる者にとって有益なもの」ということばに表わされている。コーランが現代にとって有益なものであるならば、コーランの内容そのものが近代的に理解されなければならない。そこに近代イスラムのコーラン解釈の態度が出てくるのである」という指摘である(前掲書)。

宗教、民族の相違が対立を引き起し、虐殺や戦争に発展することが多い今日の国際状況のなかで、各宗教の存在は注目されるであろう。

それはそれとして、伝統的ムスリムたちのあいだでは、やはりなんと言ってもクルアーンにもなつてアラビア語の神聖性を尊重する点があるわけだが、ひるがえってここで、仏教の言語観ないし、翻經について触れておきたい。

仏教では、特定の文字や言語を絶対的存在(ことばや文字で表現出来ない法身の象徴として尊重する立場があり、一方に言語、文字を依用はするが絶対視しない立場もある。前者は、たとえば真言密教であり、後者

は、たとえば禪宗である。いま、禪宗はしばらくおく。日本の真言密教の祖空海(七七四―八三五)の立場を考慮しながら言えば、サンスクリットの文字、字音、字義の研究を悉曇学といい、「悉曇文字の起源は地中海沿岸地方に住んでいたセム族の文字、いわゆるセム文字に起源をもつ」といわれる(宮坂有勝稿「悉曇学」『講座密教』4 一九七七年 春秋社刊)から、セム族の宗教であるイスラームともどこかで接点をもつのではないかとも思われる。中国仏教史上最高の訳経僧といわれる玄奘(六〇二―六六四)は、『大唐西域記』において、梵字悉曇は、「梵天の製するところ」とのべている。梵字は、インドで神とする梵天(ブラフマン)がつくったというのである。この玄奘の記述は、いまアラビア語のクルアーンとかかわりで見るとき、きわめて興味深いものがあり、けっして見のがすことの出来ないところである。ただ空海は、この説を否定しているが、しかし、日本の真言密教は、梵字、梵語を神聖視している傾向があつて、大日如來の象徴として尊崇するところがある。空海は、真言(サンスクリット)は幽邃で深い字義があるので、誤解されやすいので、インド伝来のもとの梵本をそのまま用いることもあるとのべている。前後するが、中国の五胡一六国時代に登場する仏典注釈の祖、道安(三二―三八五)は、仏典を翻訳するとき、注意すべき事項として「五失本、三不易」を説いた。五失本とは、漢語に翻訳するに際して五つの規定内においては、胡本の原形を失しても止むをえない事項であり、三不易とは、經文を勝手に易えてはならない三つの根拠である(鎌田前掲書)。また、玄奘は、「五種不翻」ということを示している(法雲編『翻訳名義集』序)。インド、サンスクリット語の仏典を中国で翻訳するにあた

って原語を音訳としてとどめておく五つの基準である。即ち、秘密衆生秘密、如来秘密の二種があるのゆえに訳せず、多義のゆえに訳せず、この地に無きものは訳せず、古風を存するがゆえに訳せず、訳せざるを以て利多しとなすというのが五種不翻である。

このように、仏教においても、特定の文字、言語を特別視ないし、神聖視している宗派がある。また、翻經にあたつてはある部分を訳出しないで残すなどの注意を払っている場合がある。あるいは、また、特定の枠のなかでは、原本のかたちを失つてもやむをえないなどの措置を講じている。もとよりイスラームのクルアーンないしアラビア語とは、同日の談ではない点もあるが、ある程度の共通点を見いだすことも出来るのであるまいか。

### 坂本蠡舟（健一）のことども

わが国最初の日本語訳クルアーン『コーラン経』上下二巻の訳者、文学士坂本健一（蠡舟）のことどもについては、私には、ほとんど不明である。

『コーラン経』下巻の末尾に「附録」があり、そこに「回顧すれば訳者の学窓を出て始めて筆をとりしは明治三十二年刊行の麻詞末マホメットの小伝なりき。爾来星霜二十一年、今にしてその聖典コーランの訳者たり得しは仏家の因縁浅からざるもの歟」（大正九年の春分）と記している。文学士といえ、いわゆる旧制の大学令による帝国大学の文学部を卒業したことを意味する。おそらく東京帝国大学であろう。当時の

知的エリートである。坂本は明治ひと桁ころ、帝国大学を卒業して、明治三十二年に博文館から世界歴史譚第六篇『麻詞末』を上梓し、二一年ののち、大正九年に『コーラン経』を訳出した。くりかえすが、『コーラン経』は、わが国最初の日本人による日本語訳クルアーンである。大正一二年には、『ムハメッド伝』上下二巻を、世界文庫刊行会から上梓している。「イスラム教」についても、『コーラン経』を出版した世界聖典全集刊行会から上梓する予定があつたようである。また、鏡島寛之は、坂本に触れて、「坂本氏の経歴については不詳であるが、伝えきくごとく今も高齢なおよく教壇上に西洋史を講じておられるであろうか。さもあればあれ、当時この難業をとにかくも完訳し得た氏の感慨は察するに余りある。」（前掲書とのべているところからすれば、昭和の一〇年代、坂本は西洋史の教師として、どこかの学校に奉職していたこともうかがわれる。

直前に掲げた坂本の『麻詞末』は、実に、わが国では第二番めに古いムハンマド伝である。

わが国で日本語によって出版された最初のムハンマド伝は、明治九年（一八七六）林董（なまき）（二八五〇—一九一三。岩倉使節団随行の二等書記官）訳述『馬哈默伝并附録』二冊（擁海楼蔵梓 明教社刊）である。本書は、浄土真宗の僧、島地黙雷が西本願寺から海外に派遣されたとき、かの地で入手したハンフリー・プリドールの『ムハンマド伝』を、林董が口述で翻訳し、西本願寺の僧、赤松連城が筆記して成った。次に、明治三二年（一八九九）に坂本の『麻詞末』が出版されている。忽滑谷快天の『怪傑マホメット』（明治三八年、井湧堂刊）が公けにされた。忽滑谷は、曹洞宗の僧であ

る。私は、日本の仏教徒の側で、忽滑谷の『怪傑マホメット』をとりあげて論評した人を知らないので、忽滑谷の当時としては抜群の国際性とイスラームやムハンマドへの希有な関心のほどを紹介する意味で「在家仏教」誌（平成九年一〇月号）に「仏教からイスラームへの接触―曹洞宗の学僧忽滑谷快天のこと―」と題する小文を書いた。次に、松本<sup>たけし</sup>尠の『マホメット言行録』（明治四一年）、口村佶郎の『野聖マホメット』池元半之助の『マホメットの戦争主義』（明治三六年 春山房・北隆館刊）、（大正二年 ライト社・上田屋出版部刊）そして、坂本の『ムハメッド伝』（大正二年 世界文庫刊行会刊）が著わされている。

これらわが国初期のムハンマド伝の特長、意義、歴史的位置づけに關しては、杉田英明氏が詳しく論じているので、そちらにゆずる。いまは、杉田氏が「これら出版の動機は、いずれもイスラームという宗教それ自体への関心というより、むしろ「英雄」「超人」「偉人」としてのムハンマドへの関心によるところが大きかった。そして、その背後に存在していたのが、当時流行のイギリスの批評家トマス・カーライル Thomas Carlyle（一七九五―一八八一年）の『英雄崇拜論』（一八四一年）であった。それは、ほとんどの著作もが、申し合わせたようにカーライルのムハンマド論の抜粋を掲げていることから窺われよう。」（杉田英明著『日本人の中東発見』一九九五年 東京大学出版会刊）と概評しているのを紹介しておく。